

刹那・F・セイエイ、IS
世界に転生する。

てらりうむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

刹那・F・セイエイは、最後の戦いの後ある場所で目を覚ます。

そこは、彼がいた世界とは程遠いMSの存在しない世界だった。

果たして刹那は失った記憶を取り戻し、元の世界に辿り着くことができるのか…

※この小説はガンダム001期の最後の戦いの後、記憶を失くした刹那が東と協力してIS世界を切り裂くツ!!お話です。

目次

プロローグ　く散りゆく粒子の中で

1

1話　現実

13

2話　敵襲

23

プロローグ　散りゆく粒子の中で

西暦2307年。

化石燃料は枯渇したが、人類はそれに代わる新たなエネルギーを手に入れていた。

3本の巨大な軌道エレベーターと、それに伴う大規模な太陽光発電システム。

しかし、このシステムの恩恵を得られるのは、一部の大国とその同盟国だけだった。

3つの軌道エレベーターを所有する3つの超大国群。

アメリカ合衆国を中心とした『ユニオン』

中国、ロシア、インドを中心とした『人類革新連盟』

ヨーロッパを中心とした『AEU』

各超大国群は己の威信と繁栄のため、大いなるゼロサム・ゲームを続ける。

そう、24世紀になっても、人類は未だ一つになりきれずにいたのだ……

そんな終わりのない戦いの世界で、「武力による戦争の根絶」を掲げる私設武装組織が現れた。

モビルスーツ「ガンダム」を所有する彼らの名は、ソレスタルビーイング。

彼らはそれぞれの思いを胸に、世界中に現れ戦い続けた。

……
そして今、長い長いソレスタルビーイングと世界の戦いに終幕が訪れようとしていた

宇宙空間で繰り広げられる、最後の戦い。

撃たれ、切り裂かれ、魂を乗せたまま爆発していく鉄の塊からは皮肉にも美しいほどの色彩が溢れ出す。

ある者は、仲間の死を目にして嘆く。

ある者は、自身の一部を失い。

ある者は、存在意義を見失い。

多くの意思が、この宇宙の暗闇へと吸い込まれていった。

そんな激しい閃光が埋め尽くす宙域とは離れた場所で、2つの機体が搭乗するパイロットと共に己の信念を貫き通さんと魂の叫びをぶつけ合っていた。

「軍人に戦いの意味を問うとは!!ナンセンスだな!!」

「貴様は歪んでいる!!」

青と白でカラーリングされた機体が、右腕に装備した大剣を大きく振りかざし、素早く敵の片腕を切り裂く。

それでも敵は臆する事なく突撃を仕掛け、印象的なV字のアンテナが伸びる頭部を紅色に染まるサーベルでもぎ取るように引き裂いた。

「そうしたのは君だ!…ガンダムという存在だ!!」

「ぐっ!!」

頭部を失った機体は光に反射して輝く実体剣を折り畳み、代わりに現した銃口から粒子ビームを連射する。

近距離から放たれた光点の群れをモニターに見出した金髪の男は巧みな操作技術で期待を翻し全てを避け切つて勢いづいた機体を前方に走らせた。

「だから私は君を倒す…世界などどうでもいい!!己の意思で!!」

「貴様だって、世界の一部だろうに!!」

「ならばそれは、世界の声だ!!」

度重なる敗北を重ね、盟友と言える部下達を失い続けた金髪の男は、怒りにも喜びにも感じられるような感情の高ぶりを己の声に乗せて、憎むべき存在、「ガンダム」に叫ぶ。

「違う、貴様は自分のエゴを押し通しているだけだ!! 貴様のその歪み——この俺が断ち切る!!!」

「よく言ったガンダム!!」

対して、「ガンダム」を駆るパイロットは己の全てを内包するその機体の操縦桿を強く握りしめ、自らが生み出してしまった名も知らぬ復讐の鬼を討ち倒さんと再び残された右腕にマウントされた実体剣——GNソードを展開した。

緊張を超えた殺し合いの中で、2機の機体は徐々にその形を変えていた。

半壊した機体は制御を失い、搭乗者の感情の起伏を反映するように出力を上げ、背部から煌めくGN粒子の光を一気に放出し始める。

二人の男は操縦桿を思い切り押し込みそして…裂帛れっぱくの気合ほとほしいを喉から逆らせた。

「うああああああつっつっつ!!!」

「うおおおおおおつっつっつ!!!」

誰一人傍観者のいないこの空間で、二人の信念、2機の剣先が互いの腹わたを突き刺

した瞬間、爆散して広がる茜色と碧色のGN粒子が放射状に輝いた。

意思と意思が、正義と正義が、人と人が命をかけてぶつかり合い一つの光芒となったのである。

アラートが鳴り響くコクピットの中で彼は目を開けた。

「ガ……ンダム……俺……は……俺たち……は」



どれほどの時間が経ったのだろうか。

俺はまどろんでいた。

いや、まどろんでいるというより、ゆらゆらと意識の海の中を漂っている。

ふと目を開けた時、視界に飛び込んできたのは透き通るような美しい青空だ。

空気中の水分が少ないため、空の色は真つ青というよりは藍に等しい。

見覚えがあった。

それはかつて少年時代を過ごしたクルジス共和国の空だ。

視線を地表に移すと石造りの懐かしい街並みが広がっていた。

その街は戦乱によって破壊され、廃墟と化している。

茫然と廃墟に立ちすくむ俺の周りを濁いた風が吹き抜けていく。

砂埃と一緒に、どこからか花卉が風に舞い、それを目で追っていくが再び顔を下ろし

た時、周りの風景が変わっていた。

どこかの施設のようにだった。

あちらこちらに、剥き出しの配線が張り巡らされていて、焦げ付いたようなコンクリートの匂いが鼻を刺す。

起き上がろうとして、気づいた。

右腕に酷い痛みがある。

身体全体も動かすと、軋むように痛みが走る。

一旦動くのは諦めて周りをよく注視する。

すると、頭上からウサギの耳によく似た2つの物体が視界にフェードインしてきた。

「やあやあ！ やつとお目覚めかな??」

「アーン、夕は…?」

「うーん、それは私が今君にナウでしたい質問No. 1なんだけどなくー」

あまり聞いたことのないハイテンション且つ早口な話し方でそう返される。

どうやら目の前にいる人物は、女のようだ。

声の高さや、体つきからしてそれは間違い無いだろう。

加えて今の所は敵意もないらしい。

その証拠に彼女は俺の頭を自身の膝に乗せて頬をツンツンと指で刺している。

「うっ…俺は…一体…」

何かを思い出さなければならぬ気がして、脳の記憶を辿ろうとすると、身体同様に鋭い痛みが湧き出す。

「えつとねー！ よく状況を理解してなさそうな顔をしちゃっているから説明してあげる

と…私の大切なシンデレラタイムに警報アラートが鳴ったと思ったら！びっくり仰天
巨大ロボットが私の隠れ家兼住ラボに突っ込んできたわけ！で、なんだなんだと見
に行ったら君がロボットの腹の中から出てきた…っていう感じだね」

巨大ロボット…おそらく彼女が言っているのは視界のほぼ100%を占めている白
と青の機体の事だろう。

「エク…シア…」

それを目にした時、頭に浮かんだ単語を口に出す。

「ああ…やっぱり君が動かしてたんでしょ？ プン！お姉さんは激おこだよ！！こん
なにぶち壊しちやっつけてくれよ！！」

ムキーツと両腕をプロペラのようにぶん回しながら彼女は怒りをあらわにする。

俺があれを動かしていた…？

どうも記憶がスッポリと抜けてしまっていて、自分が何をしてどんな風に過ごしてい
たのかが思い出せない。

「ねえねえ…君つてもしかして記憶がナッシングなのかな？」

「…ああ。なぜここに居るのか、何をしてたのか…まったく分からない」

「あちゃー！ラボを壊した犯人が記憶喪失って…それに東さん好みの美少年だからなお
さら責めにくいよ！！」

こいつは一体何を言っているんだろうか。
それが素直な俺の心の言葉。

しかしながら得体の知れない人物だろうと、俺を助けてくれたのはこの女に違いない。

「まあいつか〜！それで美少年くんのお名前は〜？」

「刹那…F、セイエイ…」

「そつかそつかそつか〜!!刹那くんね♪」

人の名前を知って、何が嬉しいのか見当がつかないが女は異常に興奮して、むふーつと鼻息を荒げている。

今度は俺から名前を聞くことにした。

「アంతタの名前は？」

「私？私はね〜！聞いて驚け！弱小国日出る国から世界を女尊男卑にひっくり返した、
インフエニットストラトス

” I S ” の開発者!!且つ！超国家法で現在絶賛指名手配中の〜々篠ノ束
ちゃんです!!」

「……」

やっぱりなんなんだコイツはと言いかけた口を押さえる。

背後からどんどんパフパフと紙吹雪でも出てきそうな…実際出てきたのだが、相変わ

らずのハイテンションを俺が目覚めてから保ち続けて自己紹介をした女―名前は篠ノ之東というらしい。

「ならアンタに聞く…篠ノ之東…ここは一体どこだ？アンタは何者だ？”IS”とは何だ？」

すると、篠ノ之東は豆鉄砲でも食らったかのように目を丸くしてずっこけた。

次いでイタタ…とお尻をさすりながら苦笑いを浮かべている。

「あはは…何年ぶりかなあ〜私が面食らうなんて…君はどこぞのジャングルか何かで育ったのかい？でなければ本当に記憶がないんだね〜」

彼女は気を取り直して、近くのコンソールを数秒いじった後、俺の目の前にモニターを出現させた。

どうやらそれはテレビのニュース番組のようで、俺の無くした記憶を補うように一つ一つ歴史のピースをパズルのように当てはめていく。

だが、俺の型にそのピースはまったく合わなかった。

なぜならば、世界を構築する「歴史」の根底が違うからだ。

俺の記憶が正しければ今は西暦2307年のはず。

しかしモニターに映る数字は300年近く前を示している。

ユニオン、人類革新連盟、AEU…それに当てはまる組織は無く、俺の世界にあった

地球に突き刺さるが如くそびえ立っていた3本の柱。

俺が戦いに身を投じる理由に直結する物。

軌道エレベーターが存在しないのだ。

ならこの世界は過去の世界なのか：

しかしそれもまた当てはまらない。

俺の世界の歴史に、女性のみその力を扱うことができる兵器、なる物は登場しない。

「はは〜んその表情からしてさ〜？一つも当てはまらないんだね？歴史がさ」

俺の考えを見透かしたかのように、愉快に語り出す篠ノ之束。

どうしてこうも食い違うのだろうか。

湧き出した疑問もこの女しかない状況では、一先ずは解決することができてもそれ

が真実であるという確証を持つことは叶わない。

依然動きが鈍い身体を置き去りにして首だけを、青と白の機体に向けた。

何故か、この世界で信じられる唯一の物はその機体しか無いような感覚が全身に漲

る。

「ガン…ダ…ム」

再び訪れたまどろみの中でその名を呼んだ。

そのまま俺はまぶたを閉じ、沈むように眠りの世界へと向かう。

止まっていた時計の針が進み始めるように、何かに引き寄せられるかのように。

新しく、また奇妙な人生へ向けて刹那は進んでいく。

それが未曾有の事態を引き起こし、新たな時代を作る、その第一歩だとも知らずに――。

1話 現実

「ぐっ……うう」

何か柔らかい物に上から圧迫されて俺は呼吸の中断を余儀なくされる。

薄らと開いた視界には白い布が映っていた。

ほんのり暖かい感覚と、心臓の鼓動のようなドクンドクンという音を布の向こうから感じて、俺はそれが女の胸部である事に気付く。

「……触れるなっ!!」

瞬間的に、胸を押し退ける事で俺は拒絶反応を示した。

「うわあっ！ちよつとちよつと〜！さつきとだいぶ態度が違わなかな〜?!」

俺の顔を圧迫していた胸の正体は、篠ノ之束だった。

彼女は、おとぎの国の少女が着ているような装飾が付いたドレスを着ている。

そして頭には例のメカチックなウサギ耳がカチューシャの形となって装着してある。

「……すまない。触れられる事に慣れていない」

「あつそーまあいいや！あの後気持ちよさそうにまた寝ちやつたからさ、私はあの巨大

ロボットを分析してただけど…一体なんなの!!アレ!!束さんでも知らない技術がてんこ盛りだし、1番理解できないのはあのエンジン!!どんな仕組みしてるのさ!」

手に持ったタブレット端末から、データファイルを見せられる。

眠りに落ちる前はどうも記憶が混濁していて思い出すことができなかつたが、今ならそれがなんなのか、どういう存在なのかが分かる。

世界の戦争を根絶するために生み出された私設武装組織”ソレスタルビーイング”。

そしてソレスタルビーイングが保有するMS”ガンダム”

タブレットの画面に映る青と白にカラーリングされた機体。

GN-001:”エクシア”。ガンダムマイスターである俺の機体。

全ての歪みを断ち切るためのガンダムだ。

「このスペルだとさこの子は”ガンダム”ちゃんであつてる感じかな。それに機体番号がGN-001 EXIAという事は…君の世界にはこんな巨大ロボットが沢山あつたりしちゃうわけ?」

「ああ。この世界のISのように人型巨大兵器MSが軍隊規模で存在している」

「あららら〜なんとも非効率な兵器が君の世界では主役なんだね〜」

「…ガンダムは違う。既存のどの兵器をも凌駕する力を持つている」

「おお〜!刹那くんの溢れんばかりのその自信は一体どこから出てくるのかな〜?」

篠ノ之束が目を輝かせながら再び、俺の近くにすり寄ってきたところであることに気づく。

この状況は非常に良くない。この女の調子に乗せられてはソレスタルビーイングの機密情報を漏らしかねない。

それに、いくら助けてもらったとはいえまだ全てを信じるには早急すぎる…と。

「悪いが、ガンダムの事を答えるつもりはない」

「あー機密情報つてやつかい？もーもーもー！束さん早く知りたいんだよーガンダムちゃんの秘密がー!!」

「……」

「分かったよー！そんなに信じられないなら世界を見に行こう！束ちゃん特製の完全ステルス型IISに乗ってね!!」

「なっ！触れー！しゃらーっぷ!!黙ってお姉さんのおっぱいに挟まれてなさい!!!」

突然抱きしめられるような形で体を持ち上げられ、抗おうにも身動きが取れなくなる。

篠ノ之束の背中から生えた4本のロボットアームが俺をガッチリと押さえつけているからだ。

「ぐっ！貴様、離せ!!」

「やーだよ。ぱふぱふ!!さてと…CPC設定完了。ニューラルリンクページ。イオン濃度正常。メタ運動パラメータ更新。コア内エネルギーチャージ臨界。パワーフロー正常。全システムオールグリーン。東スペシャルシステム起動つと!!」

俺がアームと胸の間でもがいている内に、人間とは思えないような速さでパネル操作を行い、機体の出撃準備を済ませた篠ノ之束。

「よおーっし!!発進準備完了だよー!束さん久しぶりのIS操縦にドキがムネムネ〜」

圧倒されていると、あつという間に自身の身体が巨人につままれたように宙に浮く。

頭上に伸びた、モビルアーマーのような巨大なアームに身体を掴まれていたからだ。

さつきまで、ドレス姿だった篠ノ之束を見ると、パイロットスーツ…にしてはいささか露出が激しい外装を見に纏っている。

それだけではない、体の至る所にはピンクや白でカラーリングされた装甲が肌に吸着するように装着されていた。

俺の身体を宙にぶら下げているアームも彼女の背中あたりから伸びている。

「これが…IS、なのか?」

初めて篠ノ之束と対面した時に、彼女から提示された映像ではその姿を見る事ができなかった”IS”。

その姿を見た時に感じた素直な感情を言葉で説明するのならば――

「ふふふっ！君のガンダムちゃんに比べて小さいだろ？でもでもね悔るなかれ！IS
だつてすごいんだぞ！！」

篠ノ之束が口にした通り、ISにはモビルスーツのように人が”乗る”という概念そのものが当てはまらなかった。

”装着”するのだ。

「AIちゃん!!発進準備よろしく!!」

篠ノ之束の陽気な声に、施設全体が様々な電子音を発しながら各々の役割を果たしていく。

元の世界で何度もモニター越しに見ていた巨大なカタパルトをそのまま人間サイズにまで縮小したような光景が目映る。

ハッチが解放されると、以前地球のどこかの島で、誰かと見た事がある青い空と海が広がっていた。

『リニアボルテージ上昇、720を突破しました。発進のタイミングをマスター束に譲渡します』

AIのオペレーターの声が鳴り響くと、篠ノ之束の表情は「ニヤニヤ」という言葉に収まりきららないような笑みに変わる。

.....

「……」

「どうだったかな？世界一瞬旅行の感想は？」

篠ノ之束が操縦するI Sは、光のような速さで地球を回った。

特殊なバリアのようなもので身体を包まれていた俺は、映り込んでは地平線に消えていくすべての物に見知った世界の面影を探し続けた。

あれだけ、自らの領土を守るためにと哨戒任務にあたっていた各国のモビルスーツについては一機さえも見つける事ができず、加えて、タワー、天柱、ラ・トゥールー俺たちの世界に平和と戦争を突き付けた3本の柱は篠ノ之束が言っていた通り、存在していなかった。

それどころか、既に戦争や政治的理由によって併合したり解体したはずの国々が当たり前かのように、地図上から失われた国境線を引いている。

見たもの全てが、この奇妙な世界が現実である事を確かに証明していた。

「俺の世界は、本当に跡形もなく消しとんだようだ。俺と…エクシアを残して」

「うんうん。ようやく信じてくれたんだね。束さんも久しぶりに運動した甲斐があった

よ」

困惑と焦りを感じ、ただ俯くことしかできない俺とは裏腹に、彼女は満足気にそう口にした。

「……」

「刹那くんは見た目からしてまだ子供に見えるけど、何であんな物騒なものに乗っかってんだい??」

「……」

「ねえねえ頼むよー！君の事も知りたいんだよー!!」

「分かった。…だが少しだけ時間をくれ」

「約束だよ??じゃ、この部屋は自由に使ってくれて構わないからさ！また明日お話し聞かせてね??ばいびー☆」

部屋の中央に設置された大きなベットに身体を沈み込ませ、深く息を吐く。

この世界に溢れる情報は多すぎて、一度落ち着いて整理をしなければ頭が痛くなりそうだった。

それに混濁した記憶の整理もできていない。

部屋の隅には小さな机と椅子があり、メモや書くものなどは備え付けてあるようだ。

早速それを手に取り、思い出せる事を書き連ねていく。

俺の名前——刹那・F・セイエイではなく、本当の名前は……ダメだ。思い出せない。

最初からつまづいてしまったものの、その後は特段詰まることなくサラサラとペンが動いた。

出身地。幼少期の事。元の世界の情勢。ソレスタルビーイングに所属していた事。マイスターとしてガンダムに乗り、武力介入を行った事。

そしてこの手が、既に両親を含むいくつもの命を奪っている事も。

しかし、名前と同じく全く思い出せない事がもう一つあることに気付く。

ソレスタルビーイングの仲間、背中を預けあつたマイスター達、戦いの中で出会つたどこかの国の王女。ある国で知り合つた学生。計画に無い三機のガンダムのパイロット……。

なぜかその人物達が存在していた事も、自分と関わりがあつた事も、全て覚えているというのに。

顔も、声も、性格も、もやがかかつたように思い出せなかつた。

最後の戦い。

気を失つた後に一体何が起こつたのだろうか。

考えてもその答えは浮かばなかつた。

明日、篠ノ之束に俺の事を話した後、エクシアを動かしてみよう…。

俺と共にエクシアがこの世界に存在している事には何か理由があるはず。

そんな事を考えながら、着ていたパイロットスーツを脱ぎ、いつのまにか用意してあったシンプルなカラーのジャージを着て目を閉じたのだった。

2話 敵襲

慣れない環境で疲れが溜まっていたのか、一度も起きる事なく、朝を迎えた。

柄にもなくあくびが出た事に戸惑いはしたが、こんなリラックスして睡眠する事できたのは本当に久しい。

ここ最近…と言ってもあの最後の戦いからどれほどの月日が経ったのか分からないから本当に最近なのかは分からないが、地球連邦の擬似GNドライヴ搭載型によるトレミーへの襲撃は激しく、まともな睡眠は取れていないに等しかった。

日の光に照らされてベッドの白が明るさを増す。

今まで当たり前のように隣り合わせだった「死」が、この世界ではとても遠くに感じられる。

そんな形容し難い不思議な感覚に陥っていた。

「やあやあ！グツモーニン!! 刹那くん♪昨日はよく眠れたかな〜？」

「…：籐ノ之束」

「えっ！なにになに？その顔！お姉さんの事萌え死にさせる気!?!」

相変わらず、意味不明な発言をひっさげて部屋に侵入してきた篠ノ之束の手にはマグカップが2つ握られていた。

「はいこれ。美味しいよ？東さん特製コーンポタージュ♡」

コーンポタージュ：聞いたことはあるが口にしたことはないその黄色いクリーム状の液体が入ったマグカップを受け取る。ほのかに熱を帯びたマグカップの温度が手のひらから全身に伝わっていくようで、これもまた不思議な感覚であった。

「あつたかいでしょ」

「…」

「ゆっくりでいいからさ。君の事教えて欲しいな」

「分かった」



「戦争根絶…か。君の世界はよっぽど戦争が好きなんだね」

俺がいた世界の有り様を話すと、彼女の顔には悲しみの色がさしていた。

「この世界は違うのか？」

「ううん。おんなじだよ。今もどこかで、誰かが当たり前の日常を奪われている。でもそんな苦しみを知らないまま、生きている人達もたくさんいる。人間って変わらないんだね」

「……ああ」

戦争というものは……憎しみというものはそう簡単には消えない。

ある国が平和を唱えていても、大地を挟んだ裏側では銃弾が飛び交い、罪なき人々が死んでいく。

そんな矛盾を抱えているのが俺が知っている世界というモノ。

矛盾。

思惑。

思慮。

妬み。

嫉み。

憂い。

憎しみ。

悲しみ。

全てが一つの苦しみとなって、星を蝕むのだ。

「俺は…俺のような歪んだ存在が生まれてきた世界を変えたいと願った。だが、願うだけでは何も変わらない。だからガンダムに乗り、戦った…その先に平和を信じて」

「刹那くん…」

「名前も顔も思い出す事はできないが…共に戦った仲間がいる。彼は言った…」

” お前は変わるんだ。変われなかった、俺の代わりに…”

「例え、異なる世界であろうと、俺は戦う。未来を掴むために…」

このとき、篠ノ之束はウエーブがかかった黒髪の、まなじりのやや吊り上がった少年が生きてきた人生の壮絶さを思い知った。

と同時に彼の外面からは推し量ることのできない内面的な強さも。

彼は知っているのだ。

戦いで生じる痛みを。

死の恐怖を。

人類が未だ、振り解く事の叶わない矛盾を。
それらに目を背けない勇気を。

…この子ならできる

篠ノ之東は直感でそう感じた。

自身が想像する理想を叶えられる…私達を導いてくれる”天使”となりえると。

「刹那くんー」

お願いを聞いてくれないかな?…と言いかけたところで、けたたましい警報アラートが部屋に響き渡った。

その直後に、施設全体が大きな振動に襲われる。

「なんだ!?!」

「A Iちゃん! 状況は?!!」

『外部から敵の襲撃あり。戦艦3隻、内一隻に高エネルギー体を確認。アンノウンの所属組織、国籍不明』

人間味が感じられない、無機質な声が、敵の襲来を告げる。

この施設自体、強力なシールドに守られてはいるものの、戦艦からの容赦ない艦砲射撃にいつまで持つかは分からない。

篠ノ之東は、珍しく動揺していた。

世界から狙われるような彼女もやはり女性だ。

これほどまでの襲撃を受けた事は経験になく、判断が鈍っている。

対して、刹那は冷静だった。

脱いでいたパイロットスーツを着用し、部屋のパネルを開ける。

「アンタは早く脱出しろ！ここは俺が食い止める！」

「ど、どうやってさ!!」

「エクシアに乗る」

「無理だよ！今あの機体は動かないはず！」

彼女の制止も聞かず、刹那は一直線に格納庫への道を駆け抜ける。

今、彼女を死なせてはいけない。

彼の中の何かがそう感じていた。

格納庫に着くと、装着したヘルメットから遠隔操作でコックピットからワイヤーケー

ブルを射出させ、それに掴まる。

ハッチが解放されたままのコックピットに体を滑らせ、操縦桿と中央部にあるパネル

式の操作端末でエクシアの起動を試みる。

「くっ……なぜ動かない！」

束を守るといふ刹那の思いも虚しく、エクシアは起動しなかった。

再度、起動のための操作を繰り返したが、その白い装甲に覆われた2つの碧眼に光は灯らない。

「……………」

エクシアと同様、刹那はコックピット内で静かに俯く。

『施設損傷率20% アンノウンから高エネルギー体射出を確認。真っ直ぐこちらに向かっていきます…施設損傷率30%……』

揺れが激しさを増すにつれ、AIの報告する状況は悪くなっていく。

モニターに映し出されていたのは、ISではなく、モバイルアーマーのような巨大な兵器だった。

それは以前、大国の軍内部で開発されていた兵器であり、ISの登場によってその計画自体が泡のように消えてしまったものでもあった。

そんな兵器が、ISの開発者である自身の拘束の為に配備されていたことを束は知らない。

「…答えてくれエクシア」

両手で動かない操縦桿を握りしめ、刹那は小さく息を吸い、囁くようにエクシアに問いかける。

『施設損傷率40%を突破しました。シールド維持率低下』

瞳を閉じて、彼は運命の日を思い出す…

少年は駆けていた。

必死の思いで戦場を駆けていた。

街の路地を右へ左へと駆け抜けていく。

地形は頭の中に叩き込まれていたが、時折、粉碎されたレンガの破片で足を滑らせ、路面にまき散らされた瓦礫につまずく。

それでもなお、もつれる足を懸命に立て直して一心不乱に駆け続けていた。

「この世界には…ガンダムもソレスタルビーイングも存在していない」

…何のために？

死の恐怖から逃れるためだ。

飛び交う銃弾。

その1発にでも当たれば死ぬ。

死ななくても、肉体はいくらでも激しい苦痛と流血に見舞われる。目も眩むような恐怖。

その恐怖から逃れるために少年は駆け続けていた。

決して、理性的にはない。

ただ本能が勝手に両方の足を動かしているだけだった。

『機動兵器、攻撃体制に移行。電磁場の変調を確認。空間圧縮率上昇』

胸に抱えたマシンガンが重い。

息が苦しい。

心臓の鼓動が痛いほどだ。

敵軍の攻撃により、瓦解した建物の影に飛び込み、少年はようやくわずかな休息を得た。

肩を上下させて呼吸を繰り返す。

頬をつたつて汗が顎から滴り落ちる。

額に張り付いたウェーブ気味の髪を少年は乱暴にぬぐった。

「だが、戦争は、争いは、歪みは同じように存在している！」

少年はグリップを強く握った。

聴覚を通して彼の中にあらゆる音が流れ込む。

機銃の掃射音、怒号、モビルスーツの駆動音、火薬の爆発する音、破壊される建物の

音。

そしてー声。

全ゲリラ軍の兵士達に向けて発信されている無線放送の声だ。

『この戦いは、神の御前に捧げられる…聖戦である…』

(何を…言っている！)

『伝統を軽んじ、神の土地を荒らす不信仰者共に…』

(何を、言っている!!)

『神の代行者である我々が…鉄槌を下すのだ…』

繰り返される抑揚の無い声に、苛立ちが募る。

少年は怒りの目を持ち上げて、言った。

「この世界に…神なんていない!!」

口に出して言わなければならぬほど、少年は苛立っていた。

そのまま、再び瓦礫に紛れて走り出す。

しかし、声を出してしまったからなのか、近くの空を銃弾がヒュンツと切っていく。

当たるまいと身をかがめ、打ってきた方向に顔を向けたのは間違いだった。

瓦礫に足を取られ、少年は地面に倒れこむ。

『機動兵器から高エネルギーミサイル接近。着弾まで15…14…13…』

すぐさま起き上がる事を試みたが、既に身体は限界を迎えていた。

かろうじて動いた頭を、モビルスーツの銃口へと向ける。

楕円を描いた頭部装甲の暗部に光る、赤い一つ目と視線が合った。

(死ぬ…のか?)

以前は死への恐怖など、微塵も感じていなかったはずだが今は違う。

死は神の元へと導かれる崇高な行為などではない。

死は、ただの死だ。

自分という存在がかき消されるだけだ。

だから少年は渴望した。

(ーー生きたい!!!)

瞬間、赤い光がモビルスーツを次々と突き刺した。

貫いた光が頭上から落ちてきたのを見て、少年は上空を振り仰いだ。

光があった。

まばゆく輝く白い光。

あまりにも眩しく、はじめは顔をしかめるように目を細めていなければならぬほどの光に包まれた、モビルスーツの姿があった。

「そんな…そんな…そんな!!ダメだよ!!死んじや嫌だよ…!!」

その場に崩れ落ち、その身を挺して自分を守ってくれた少年へ向けて涙を流す。

だがモニターが消えたのは、通信設備の故障でも、ましてやエクシアが撃墜されたからでもない。

ミサイルの着弾した場所の隔壁には巨大な穴が開き、陽の光が差し込んでいた。

灰色の煙の中で極粒の雪のような青白い光が群れをなすように輝いているのが、敵機動兵器に乗っていたパイロットにも、敵戦艦からも、刹那の安否を確認しようと格納庫に走ってきた束にも、見てとれた。

「動いて…るの?」

鋭い碧眼が光を取り戻し、煙の中から敵を見据えている。

その眼光に敵パイロットは得体の知れない恐怖を感じて、咄嗟にミサイルの発射スイツチのトリガーを引いていた。

正常な起動を果たしたエクシアのコックピット内に、ミサイル接近のアラームが鳴り響く。

刹那は操縦桿を強く握りしめ、思い切り押し込んだ。

「刹那・F・セイエイ…目標を…破壊する
!!!!」